

テキストを先鋭的に身体化し、現代の狂気を出現させる

テラ・アーツ・ファクトリー「ヌード」『ツアラトストラ』
9月30日～10月2日 ザムザ阿佐ヶ谷

テラ・アーツファクトリーの6年ぶりになるという本公演は、ほぼ男性のみのキャストによる「ツアラトストラ」と女性のみ「ヌード」という作品の2本立てだった。まず、非公開の試験公演を重ね、そこでは演出家だけでなく出演者も創作に深く関わるといふ、制作プロセスに興味を持った。どちらの作品も様々な種類のテキストの引用によって成り立っていたが、それらの言葉たちが、俳優たちの発声や身体表現によって解釈し直され、より豊かな意味を含む新しい「テキスト」として再創造されていたように感じたのはこの独自な制作方法の結果と言えるだろう。例えば「ツアラトストラ」では「死体」という単語が俳優たちの即興によって、「死体としたい…遺体…遺体としたい…痛い」などと展開され、その意表をついた意味の繋がりにハッとさせられる。そして最も衝撃的だったのは「女子高生コンクリート詰め殺人」の裁判記録が読まれるシーン。加害者の少年達の常識では考えられない少女に対する暴力と陵辱行為の数々が、黒いテープの目線をつけた数人の俳優によって語られ、いつしかそれは言葉の断片の絶叫へと変わっていく。聞いていて実際気分が悪くなる。これは言葉の意味が、感覚全体を通して伝わってきたということの証拠だろう。「ヌード」では顔を完全に布で覆った女優達が、あるAV女優の性

体験についての手記を読み上げる。ショッキングな内容のテキストにも関わらず、抑えた調子で他人事のように携帯電話を見ながら読まれる。誰にあてるでもないモノログのような告白と、時折たかれるカメラのフラッシュの音がうつろに響く、静かだが強いインパクトのある作品だった。2本ともテキスト中心、しかもセクシャリティや暴力といった問題が主題の作品であったが、その表現は決して観念的ではなかった。それらのテーマは具体的な感覚を通して、観る側につきつけられていたのだ。(小笠原幸介)



若尾伊佐子 富沢房江
撮影/田中英世

ダンスの本質を問う実験はまだまだ続いていくのだ!

中西レモン企画
「ちよっとした舞・踊の祭典 畳半畳 vol.4」
9月5日～9月6日 神楽坂ディーブラツ

「畳半畳」は、自発的に応募した創作者が半畳の空間で自由な行為を行う、アンデパンダン形式のダンス、パフォーマンスのシリーズ企画である。今回の「其四」の出品作を「彫刻」に見立てながら解説してみよう。富沢房江は異国の神の偶像のようだ。原始的な手法で造った、知識人には理解できない形。ノシロナオコは、畳半畳と同じ大きさの額縁を自作し、これを用いて自らをフレーミングする。縦横 水平 垂直、見ているものの重力が奪われる。木村由、卓上での回転は、彫塑を回り込んで見るよういて、錯覚に陥る。彫塑には存在しない生命力に溢れている。椎名利恵子は百済観音のように立ち尽くす。富田秀康 (guitar) が、静かに垂直に燃え盛る炎を演出する。椎名の肉体は一見軽やかに感じるのだが、その一歩一歩に強力な磁場を感じさせる。小杉裕美、中世のヴィーナスが絵画から飛び出し、動く。前半の波がうねる感触=リズムから、後半の石を積み上げるような動作=旋律に共通するのは、女神のみが携えることが許される優

雅さである。野出春子、呪文の末に古代の道祖神が突然来迎し、暴れる。儀式 祭を超える時空間。言葉の持つ力と体が表すことのできるイメージが、瞬時に合成した。若尾伊佐子に感情の凍結 解除という、ギリシャ・ローマ芸術の変遷が読み取れる。エロス・クナトス、現実 非現実という二元論では夢は訪れない。その動きは内面を越えて、二元論に到達する。荒木志水、20世紀のモホリ=ナジが求めた、彫刻のマスの解放を求めた仕事に似る。単調な動きは固体から気体への解放に導いた。jerrosの音響が、時間概念を支える。人の生きる時間、ライフ・サークルさえも感じさせる。村田いづ美には、五体投地にも似た、非=日常性から降臨する神の形が浮かび上がった。坊主にとつて修行は日常である。では我々の日常とは何かという問題提起も忘れていない。

ここでひとつお断りしておくと、「彫刻のようだ」という言い方をしても、動く人物よりも彫刻の方が芸術的だとか、優れていると考えているわけではない。そもそも「動く人物」とは、あらゆる彫刻のマトリクスであり、その表現力はあらゆる彫刻のフォルムに先行する。私は今、そんなことも感じている

さて、最初にアンデパンダンと言ったように、この「畳半畳」には、行為の枠組みというのは設定されていない。だからこそダンスとは何かという根底的な問を放つことが可能になるのだと思うが、今回は、おもに照明の使い方が単調だったという理由により、中西が同じような創作者を選んで並べているように受け取られる側面があった。一人一人は個性的なのだが、空間のいわゆる作り込みがもうひとつだったのだろうか。見る人が背の後ろに回り込めないということもある。畳半畳の面白さは、見る角度が開けていて、創作者からすればどこからでも観客に見られてしまうところにあるのではないだろうか。畳半畳に何度も出演している創作者達は、荒削りで未完成でありながらも、確実に前の回に比べて優れた公演をしている。それは、今回初出演の創作者にも期待できるだろう。常に創造的で新しい形を求めめる姿勢は、定型ではなく、本来的な「前衛芸術」の欠かせない要素である。この期待が、畳半畳に足を運ぶ理由になっていく。(宮田徹也)



木村由 椎名利恵子 村田いづ美



「ヌード」

INTOWN モンゴルより凱旋

●9月某日 世界劇場の小屋、新宿シアターPOO。その奔放な想像力と表現力に幾度、夢心地になっただろう。創立30周年の今年9月、世界劇場はモンゴル公演を敢行、ウランバートルの大学講堂と児童劇専用劇場で新作を上演、2千数百名を動員して大成功のうちに帰国した。日本から演劇と名の付くものが行ったのは恐らく始めて。持ち帰ったアンケートには「素晴らしい」との賛辞が並ぶ。乾燥・砂漠化で伝統の牧羊を諦め、都市に流れ込む草原の民の子供達が、マンホール・チルドレンと呼ばれる孤児になる。ウランバートルの孤児たちに、羊と同じ言葉を

喋っていた頃の話の演劇で見せよう。それがツアーの動機でした」と、主宰・小島邦彦さん。小羊たちの沈黙。凱旋公演 シアターPOO 12月23日～25日 TEL:03-3341-8992
●9月15日 高円寺「円盤」。強烈な声を武器に、民族音楽からアバンギャルドまで多彩な活動を展開するボイスパーフォーマー、徳久 william 幸太郎企画によるイベント『ウイリ山ウンテン』を観る。前半は william によるソロ。日本最古の楽譜『琴歌譜』を声とギターによって再現。全く予備知識無しで聴いたが、ゆったりと繰り返される旋律と、williamの空気を直接振動させるような声がとても魅力的だった。しかし、この日のパフォーマンスでは、それが古典芸能へのオマージュなのか、そうではなく表現手段の一つなのか、といった点がよく分からなかった。表現したい内容と琴歌譜という形式に強い必然性が見いだせれば、もっと良いパフォーマンスになる可能性があるのではないかと。ともあれ今は実験段階なのであろう。このイベントは実験の場なのだ。後半は灰野敬二、瀬尾亮とのトリオで即興ボイスセッション。ボイスパーカッション的な手法も用いながら圧倒的なパワーとスピードで音をまき散ら



す瀬尾、民族音楽の歌唱法等から独自のやり方で完成させたノイズ声をコントロールする william、そして2人の音の合間を縫い、繰り出される一撃のような灰野の叫び声。三者三様の声飛び交う真剣勝負を堪能。毎月第2土曜日に催されるこの企画、11月は能楽師今井尋也をゲストに迎え、能とノイズ音楽の融合「能イズ」を行うという。こちらにも期待したい。(小笠原幸介)
●10月某日、岐阜市にある寺田就子展「中空宙・思い出す角度」へ。以前からギャラリーのホームページで気になっていた、かわいらしい作品が並ぶ。かわいらしい、と言っても、流行を追うものや少女趣味と

子羊たちの沈黙

戦前はデパートだった古い建物にアーティストが棲息。そこがベルリン公演の会場だった。

山の手事情社「タイタス アンドロニコス」
9月8日、9日 ベルリン・タヘレス劇場

「終演後、お客様のご質問に答えていただけるかしら？」ベルリンのプロデューサー・ガビさんに尋ねられ、「いいですよ」と答えた。いわゆるポストパフォーマンスストークというやつだ。数年前まで劇団の公演のたびにおこなっていたことなので、気軽に応じた。このポストパフォーマンスストーク、日本でもたまに行われているが、あまり一般的とは言えない。正直、活発な議論になりにくいと感じ、私自身もここ数年はやっていない。

去る9月8日、9日とJAPAN NOWに参加する形で、ベルリンのタヘレス劇場で、新作「タイタス・アンドロニコス」を上演する機会を得た。その公演終了後に観客の質問に答えてほしいという依頼だった。日本から来たカンパニーの公演であり、その創作意図や演出意図を知りたいという観客の要望にこたえたいということだ。

開演前に司会のインタビュアーの女性と簡単に打合せをし、公演にのぞむ。このタヘレスという劇場、戦前はデパートだったという歴史的建造物で、通りのその一角だけ見事に朽ちている。日本ならさまざまな規制で取り壊されているに違いない。歴史のしみこんだ空間は、それだけで十分券開きがある。劇場だけでなく、スタジオも多数あって、それをアーティストが占拠しており、階段の壁は芸術的な落書きで塗りつぶされている。周辺は飲食店が多く、夜遅く(朝早く)までにぎやかで、10分も歩くと、ベルリナー・アンサンブルやドイツ劇場もある。

開演は20:00。観客は入り口のバーで売っているビールやワインを持ち込んで座っている。100人強の客席を用意したが、数多くの立ち見が出る盛況だ。字幕があるとは言え、日本語でおこなわれる芝居に観客は思いのほか集中している。ただ時折ビール瓶の倒れる音がする。これには閉口するものの、客席は気にする風でもない。

1時間半の上演が終わり、22:00前にトークが始まる。驚くのは大半の観客が残っていたことだ。今見た芝居について議論をするのは、日本の感覚で言えば、ややもすると「野暮」になりかねない。それがどうやら違う。トークの機会があるのなら聞いてやろじやないか、という感覚がドイツではごく自然なのではないか。「舞台上に青色を多用しているのはなぜですか？」とインタビュアー女史。ヨーロッパでは必ずといっていいほどまず色の意味を問われる。「血なまぐさい芝居に赤を使う通俗性から逃れるためです」。通訳を介する会話はある種の抽象性を獲得する。それが海外でのトークの面白みかもしれない。観客の質疑も止まらない。「いまこの作品を上演する意味は」「俳優はなぜあのように

動くのか」「どのような訓練をしているのか」「選曲の狙いは」……「ちゃんとした劇場でやっても十分通用する」というありがたい励ましもあった。「そろそろお開きに」と司会者が告げたのは2日間とも、0:00近かった。本番より長い時間、話をしていたことになる。(安田雅弘/山の手事情社)

—JAPAN NOW 2005—

JAPAN NOW 2005は、日・E・U市民交流年事業として、現代の日本のコンテンポラリー・アートを集めて行われるフェスティバルで8月30日よりスイスの首都ベルンを皮切りに、ドイツのベルリン(9/7〜)、ポーランドのクラクフ(9/15〜)で開催された。

■日本側参加団体

*黒沢美香「Notified Visit」(ダンス) *渋谷知らずオーケストラ(音楽) *OM-2 H・ミュラー/作 真壁茂夫/構成、演出「ハムレットマシン」(パフォーマンス) *山の手事情社 W・シェクスピア/作 安田雅弘/演出「タイタス アンドロニコス」(演劇) *ジンジャントロブスボイセイ A・ジャリ/作 中島誠人/演出「ユビウ王」(演劇) *イムレ・トルマン「Voyager」(舞踏)

■現地日本人参加者

*Yui,Yuko,Ayako,Chizu「Wand und Wandel」他(ダンス) *ラップトップ・オーケストラ(音楽) *他、美術展など多数参加

ダンスブームの今こそ、 身体の強靭さを問いたい。

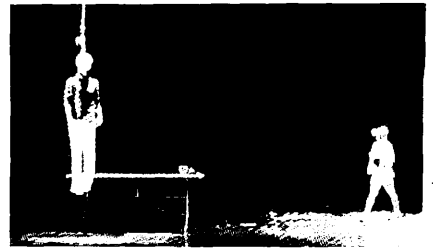
～「ダンスが見たい7!」総評～

7月12日-8月31日「ダンスが見たい7」
ディラッツ(神楽坂、麻布)

「ダンスが見たい7」は、批評家推薦10組とインターナショナル10組というプログラムだが、カップリングや共演などを合わせて30を超す舞台が2つの会場で繰り広げられた。注目の大橋可也&ダンサーズ「サクリフェイス」(8月2日、麻布)は、舞台奥の椅子から男女数人ずつ立ち上がり、踊りが始まる。ミウミウが自閉的な世界を見せ、キツネの面をつけた江夏令奈が跳ねる。垣内山香里がバットをもちキレたオハさんを演じる。関かおりは自分の足を縛りエロティックに倒れ、横で皆木正純が飛ぶ。終るとそれぞれ立ち去り、そのブレイクが奇妙な効果を出す。そして踊らないロマンス小林。スカンクがノイズっぽいギターやテレビの一部を流して緩急をつけ、激しい身体がリアルに迫りつつも、舞台への登場や退場と構成が抽象性を感じさせる作品だった。

鈴木ユキオのグループ 金魚 king-yo も新しい展開を見た。「ミルク」(8月16日、麻布)では四つん這いの男を蹴り倒し、暗転で人が替わり同じ動作を繰り返す。空間構成や低く下げた照明などが美術的で、鈴木ユキオが執拗に倒し続ける白いテーブルとその激しい音、それに絡む身体の衝撃はダンスや舞踏の垣根を超える強さを持つ。暴力性が舞台上に緊張感を漂わせ、鈴木ユキオの作り出す抽象的なイメージと身体がストレートに観客を惹きつけた。鈴木は室伏鴻のKo&Edgeで活動し、その影響が現れ始めている。鈴木はアスベスト館出身、大橋可也は和栗山紀夫に学んだが、コンテンポラリーダンス界で注目されるこの2人には、舞踏の身体性に基づく核が見てとれる。

舞踏家原田伸雄は九州に根ざして青龍會を率いているが、ソロ「私の肉体は戦場である」(8月29日、神楽坂)では、アルルカンのような白い衣装で登場し、コケッリーに



黒沢美香



右:OM2
左:ジンジャントロブスボイセイ



大橋可也

ニジンスキーの「牧神の午後」のイメージが重なって見えた。さらにウェディングドレス姿は繊細な動きで、中近東風の音楽に乗った踊りは、「舞う」という言葉にふさわしいものだった。地方や外国で活動する舞踏家たちは70年代舞踏の「匂い」を漂わせる。米国からの玉野黄市の帰国公演

「舞踏ってなあに?」(8月18日、神楽坂)は舞踏の破天荒さリリリズムを示した。また別の舞台だが、青森の福土正一は土着的な舞踏を展開(8月28日、BankART NYK)、新潟の堀川久子(はトリストン・ホンジンガーのチェロとともに精神の自由さを見せた(9月14日、横浜サマワール))

山本萌の金沢舞踏館は、オーストリアの劇団ASOUと共同制作を続けている。今回の「変身」(8月31日、麻布)の黒い舞台を動き回る群舞は、閉塞状況にある人々と不条理な世界をひしと感じさせ、風刺的にコミカルな山本のソロとともに、無言の暗黒劇としてタウシュ・カントールを思わせた。まさに数年間共同で作品を積み上げてきた成果だろう。

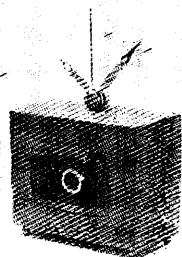
和栗山紀夫と上杉貞代の「神経の秤」(8月4日、麻布)は、上方舞の弟子和栗と大野一雄の弟子上杉、つまり異なる系譜の舞踏家の遭遇という筆者の企画だ。和栗が闇の中に裸身を浮かび上がらせ、背骨の凹凸とその緊張感が動物的な感触を漂わせる。上杉は背後のドレープの布の下から和栗を窺うようにして登場し、それぞれがソロを展開しつつも静かに絡む。和栗は面をつけた錯視的な舞踏、シャーマン、スーツ姿など多彩さを見せ、上杉はわずかに裸身を晒しストックだ。「舞踏譜」で七方舞踏の型を追求する和栗と、大野の抑制されたなかの自由を求めると上杉が、それぞれ踊りや交感する。触れるか触れないかで絡み、眼差して触れあうラストは舞台そのものとして美しかった。

舞踏には独自のオリジナリティと発想がある。今回の「ダンスが見たい7」には韓国、インドネシア、オーストラリアなどからの参加があったが、なかでも鶴山欣也や和栗などの舞踏家との交流が目立った。夏の韓国の日韓舞踊フェスティヴァルも舞踏が中心で、先日の玉野黄市らのロシア・ドイツツアーには1週間連日1500人が集まったという。国際的に舞踏の評価はさらに高まっている。日本のコンテンポラリーダンスは、少し飽和状態になっているように思うが、これを打ち破って、さらに海外に出ていくには、舞踏の身体性に学ぶところが大きいにあるだろう。その意味でも大橋可也、鈴木ユキオのような試みは重要であり、コンテンポラリーダンスも舞踏も、さらなる前衛性を追求すべきだ。なぜならコンテンポラリー、同時代とは時代を追いかけることではなく、その前衛を走るものに与えられる名称なのだから。

(志賀信夫/舞踊批評)

IN TOWN

「世界」を見る時、蛍光ピンクのスーパーボールや、展示するのに用いられたはしごなど、使のに用いられたはしごなど、使われている色やモチーフは小学生のころからのなじみさへ感じながら、それらが本来持つ意味の凶暴さや危なさも考えてしまう。写真の「テレビ」の作品は、手のひらに載るくらいのサイズで、時計の長針と短針のようなアンテナが付いた、紙製のテレビだ。パツと見はかわいいが、ついこれはどういう意味なんだらう?と勘ぐってしまう。そんな私の悪いクセに、テレビの画面には蛍光ピンクで「○」がついていた。(藤田千彩)



寺田就子展 「中空宙・思い出す角度」9月10日-10月22日 ギャラリーキャプション 岐阜

Alice Festival 2005 11月の注目ラインナップ。

アジア3都の小劇場から新たな神話が誕生

「神曲333」

◎11月23日(水・祝日) ... 16:00&19:30
◎11月24日(木) ... 19:30

「神曲333」は大阪、台北、香港でオルタナティブな活動を展開する3つの劇団が1年間にわたるコラボレーションの成果として完成させた作品だ。

「地獄」演出: Wei, Yingchuan
(台北 Shakespeare's Wild Sisters)

「煉獄」演出: Chan, Mingchao
(香港 On and On Theatre)

「天国」演出: 佐藤香登
(大阪 銀幕遊学◎レプリカント)

上記のように各劇団がテーマを選び、それぞれの方法で「神曲」を舞台化。壮大でロマンティックな神々の恋愛喜劇である「神曲」が、新しい、心躍る舞台に生まれ変わる。さる10月22日、23日には、17日間にわたり40の劇団が集う台北の演劇祭 the 2005 Festival in the Square - Arts Wonderland (2005 兩廳院廣場藝術節-藝術遊樂園)で上演され、満場の喝采をさらった。台北タイムスは「ダンテ

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場 TINY ALICE より最新ニュース

の創造的な翻案」と伝えられている。アジアの小劇場のネットワークから、現代的な表現で夢幻の境地へ誘う新しい神話が誕生するのだ。必見。

→写真は3劇団のメンバーの顔写真を構成した2005 Festival in the Squareのポスター



中国の若手たちの表現力の豊かさに注目

上海戯劇学院(上海)

「三生石 TRANSMIGRATION STONE (転生の石)」

◎11月12日(土) 15:00 & 19:00
◎11月13日(日) 15:00

上海戯劇学院とは? これは北京戯劇学院と並ぶ文部省文化部直属の国立単科大学で、1945年の

創立以来、中国の映画、演劇シーンを支える著名な作家、監督、俳優等を数多く輩出してきた名門。この大学の夢見る美男美女が92年に続いて再びアリスにやってくる。作品は、教諭を努める女性作家銭が唐代の伝説をもとに描いた「三生石」。学内の瀟洒な劇場で開催される「国際小劇場演劇祭in上海」で2004年に最優秀賞に輝いた、叙情的なヒューマンコメディである。

唐の最盛期。これは二人の男のロマンティックな物語。曾 Yuan Zeは貴族の息子Li Yuanと出会い、慕情に心を乱すが、やがて深い友情で結ばれ、南方

ALICE FESTIVAL

の転生石での再開を約して別れる。春が幾度か巡り、二人は南方への不思議な旅の途にあった。

感覚派の演出家、孟小軍の精緻な美意識が冴え渡る舞台である。身体言語もじつに豊かで、優雅で躍動的な俳優たちに、思わず見とれるかもしれない。中国の若い演劇がもつ表現力の幅広さには、誰もが驚くはずだ。



振付家・伊藤多恵が、ダンス界きっての個性派ダンサーとともに放つ100%オリジナル純生ダンス。動きの連続連打!

ダンスシアター他動式「ダンスシアター他動式「穴-The Hole」@麻布ディブラツ

11/10(木)&11/11(金) 19:00 11/12(土) 15:00&19:00 11/13(日) 15:00
前売¥3500 当日¥3800(整理番号付き) 問=03-3411-4081(オフィスコトネ 平日10:00~18:00)
振付=伊藤多恵 出演=黒沢美香 吉沢恵 野和田恵里花 松原佐紀子 池田素子 若松智子 公門美佳

「ダンスシアター他動式」と改称して七年ぶりに活動を再開した振付家の伊藤多恵さんにお話を伺いました。——作品タイトルの「穴」は、どんなイメージなんですか。

伊藤——ある日、気分よく振り返ったら、あるはずのものがなかった。あるはずだと思って振り返ったわけでもないんですけど、なかった。そのとき、「ない」というより、「ポッカリ穴があいている」と感じたんですね。それが、「穴」について考え始めたきっかけでした。考え始めたら…子供の頃は「障子の穴から覗くときには違う世界になる」と信じていたことを思い出したり、自分は今も、開け放して考えるより、穴を覗くようにものを考えているなあと思ったり。その方が、極彩色で痛み付きになる世界が広がるなあ、とか。穴には、猥雑さや、悲しさや、こわさや、とにかく不透明なものが混沌と密集していて、それでいて、風が吹いてたりしますよね。デヴィッド・リンチの映画を例にすれば、「鍵穴」は具体的な穴です。具体的な穴には本来終わりがあがるわけですが、私とその穴にいったんすい込まれると、穴は具体的なではなく、深く深く通り抜けて出た場所は全く別世界になっている…というようにイメージが広がります。「穴」というのは、それ自体はつかみどころがなく、感触もない。それなのに、いっばいの感覚を伴って、想像はいくらでもふくらむ。だから人は、実体がないにもかかわらず、それを「穴」と表現するのだと思います。

——ダンサーが、また、個性派ぞろいですね。

伊藤——はい。好きなダンサーたち。その一語に尽きます。偶然、誰一人カンパニーに属していない。結果そういう人を好きになったということなんですけど、皆自分でそれぞれ場所を見つけて選んでダンスをしている人たちで、果敢だなと感じます。七年前まで活動していた「ダンスプロダクション」の頃、自分のムーブメントを見つける作業をしていた時期に時間を共にしてくれた人たちが今回再会し、年月分の体がちゃんと過ぎているのを見てたまらなく嬉しくなりました。付着するものは構わず付着させて、要らないものは惜し

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

げもなく捨てて歩いてきた体が確かにそこにある、といった感じです。今回初めて出演してもらう人たちもそうですが、やってきた道がそれぞれ違うものだから、互いにあいられないところも含めて、くれないよさがあります。紛れもなくここにいてる七人ですが、たまたま、それぞれの目的の通過地点にここがある。そのことが、私には魅力的ですね。

——なるほど。では、伊藤さんはダンスをつくる上で何が一番重要だと考えていますか?

伊藤——感触のない体はつまらない。どんな動きをしたとしても、感触が鈍ければ、時間も空間も変わっていかないし、それぞれの感触が違うからこそ、人数分だけそこに人がいる意味があると思うんですね。手触りや皮膚感。たくさん「感触」です。(構成 高見亮子)

IQ5000まどろみ戦士最新作!! 植物の種と人間の種を巡って、マドロミ世界で起こる植物達の反乱。そして、立ち向かうは三姉妹!!



IQ5000「まどろみ戦士~WORLD SEED~」

11/29(火)&11/30(水) 19:30
@神楽坂ディブラツ
前売・当日=¥1500 問=090-4223-8854
作・演出=藤原善之介 出演=IQ5000メンバー

Q—IQ5000はどのような芝居をするのですか?
A—マルチメディアインプレッションなんて言葉を使っていますが、基本的に舞台装置はほとんど使わず、なま身の体で全てを表現しながら、しかもリアルな芝居をするように挑戦しています。まるで映画を見ているようなシーン展開を実際に舞台上で表現したり、見る人の想像力を加速させるような構造を考えています。小さな劇場が、これほどにまで大きく感じた事がないと思わせるような事もします。ある意味実験的な舞台ではありますね。映画でもない、テレビでもない、そして舞台上しか出来ないが他の人たちには出来ないような事を常に目指しています。
Q—次回、まどろみ戦士シリーズの舞台をするらしいですが、

どんな内容ですか?
A—まどろみ戦士は、今から4年前に私が書いた作品ですが、そのとき毎回完結するもの12作品先まで考えてしまい、そのシリーズの5作品目に当たるものです。話の大筋は、何時もまどろみのお爺ちゃんが主人公で、そのまどろみに入った孫娘たちと共に冒険するファンタジー作品です。そのまどろみの住人たちが、毎回色んな旅をし、成長をして行く様を描いています。今回は、そのまどろみの世界の住人だいつも出てくる恐ろしい三姉妹を中心に入っていきます。時代は第二次世界大戦が終わる頃、実在した三姉妹とその両親、隣に住む少年。戦争によって徴兵されるのを逃けた父親をかばいながらも生きていく三姉妹。なんとしてでも生きていく為に行った事があだとなり、官憲に見つかり、殺されてしまう両親。それを悔いながら、また自分たちを責めながら倒れていく三姉妹。その三人を助かし、二度とそのようなことが起きないように、永遠に語り継ぐため少年はまどろみの世界を作る大きな木(世界樹)と、それを守る大きな鳥とに掛け合い、三姉妹の無念さをどう晴らせばいいのかわかろうと四苦八苦する話です。



現代社会の浮き彫りにする作品が集結。 東京国際芸術祭2006のプログラム。



芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.24

東京国際芸術祭2006について

特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパンは、例年どおり2月、3月に、東京国際芸術祭2006を開催する。今回の芸術祭も、前回と同様に演劇の社会性、思想性、政治性を問うということに変化はないが、とはいえ、かなり大胆な変身をとげるための実験的な試みがなされている。成功すれば、このフェスティバルの寿命は少し延びるだろう。

我々の身体に知らずにしみ込んでくる素朴な慣習、あるいは作為に充ちた社会的通念を打ち破る力は、今アートにはないにしても、その奥にある権威の不様な姿を暴き出すことくらいはできていいはずだ。

今回もまた旧東ドイツの演劇と中東の演劇、ダンスを招聘している。ドイツ座のプロダクションであるタールハイマー演出の「エミーリア・ガロッチ」は非常に評判の高い演劇だが、前回のフォルクスビューネのカストルフとは違って官能的で洗練された作品である。

中東シリーズは3年間プロジェクトの3年目だが、あまりの反響(日本ばかりでなく、アジア諸国や中東諸国でも)の強さに、5年に延長することにした。クウェートのスレイマン・アルパッサムは初年度「アルハムレット・サミット」を公演したが、今回は2度目となる。東京国際芸術祭、クウェートの文化センター、ロンドンのパービカンセンターとの共同製作として世界初演の新作を発表する計画である。またイスラエルの話題の振付家ヤスミン・ゴデールの作品「ストロベリークリームと火薬」という意味深なタイトルの作品を紹介する。これには舞踊評論家の乗越たかお氏の強い推薦が

あった。アート界では、アメリカは孤立している。9.11同時テロからイラク戦争まで、多くのアメリカのアーティストの意図に反して、アメリカ合衆国政府は強行路線を突進し、それに従って、アメリカのアーティストは孤立を深めていったと考えられる。どのような方策を国家がとろうが、アーティスト間の交流を絶やしてはいけない、というのが我々の主張である。アメリカのプレイライト・センターと日米友好基金の協力のもと、非常利組織アート・ミッドウエストとの共同製作で、9.11以降の創作4本を訳し、日本の演出家、俳優によってリーディング形式で公演する。なお、このプロジェクトも3年継続する。

リージョナルシアター・シリーズは、今回終了後大きく形を変えることが決まっている。今回の新しいチャレンジは、日本(東京)の演劇の創作を開始したことである。我々は、2004年秋より豊島区の協力で、西栗鴨に稽古場、スタジオ等(にしがも創造舎)を開設し、作品を生み出すためのインフラを整備してきた。さらに演出家の倉迫康史氏や阿部初美氏などをレジデント・アーティストとして、にしがも創造舎を拠点に作品創作に取り組める体制づくりに着手し、それを東京国際芸術祭で作品を発表することにした。

ドイツ演劇を紹介する中で、ドイツでは「ドラマトゥルク」という職能が演劇づくりに大きな役割をはたしていることを理解した。我々が主催するANJ講座シリーズの中で「ドラマトゥルク」を知る講座を開催するなど、その理解を深め、普及する活動を展開し、今回はそれを実践に移すことになった。日本でドラマトゥルクとしての役割を担える希有な人材である長島確氏と演出家阿部初美氏の共同でサラ・ケイン作「4.48サイコ

シス」を上演する。この方法が、日本の演劇界にいい刺激となることを期待すると同時に、ドラマトゥルクをいかに育成するか、大きな問題にアプローチしていく考えてある。(東京国際芸術祭ディレクター 市村作知雄)

東京国際芸術祭2006

- TIF国際共同製作事業 アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズ vol.1 [アメリカ] ドラマリーディング
- ◎にしがも創造舎 2月10日(金)~12日(日)
- ・「Demonology」/作=ケリー・スチュアート ・「BELLAGIO」/作=マック・ウェルマン ・「ACT A LADY」/作=ジョージ・ハルソン ・「THE SEX HABITS OF AMERICAN WOMEN」/作=ジュリー・マリー・マイアット
- ヤスミン・ゴデール and The Bloody Bench Players [イスラエル]
- ◎にしがも創造舎 3月1日(水)~4日(土)
- 「ストロベリークリームと火薬」振付=ヤスミン・ゴデール
- TIF国際共同製作事業 スレイマン・アルパッサム・シアターカンパニー [クウェート]
- ◎にしがも創造舎 3月10日(土)~16日(木)
- 世界初演! 「カルフ・フィルムナ・王子たちの舞(英語バージョン)」作・演出=S・アルパッサム
- ドイツ座 [ドイツ]
- ◎の国さいたま芸術劇場 3月19日(日)~21日(火・祝)
- 「エミーリア・ガロッチ」原作=レッシング 演出=ミハエル・タールハイマー
- にしがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.2 [日本]
- ◎にしがも創造舎 3月18日(土)~21日(火・祝)
- 「4.48サイコシス」
- 作=サラ・ケイン 演出=阿部初美 ドラマトゥルク=長島確
- スリーポイント・プロデュース [日本]
- ◎下北沢[劇]小劇場 3月22日(水)~26日(日)
- ベケット・ライブ vol.7「見方がいいいぢが」(仮題)
- 原作=サムエル・ベケット コンセプト・翻訳=宇野邦一
- 演出=三浦基 出演=鈴木理江子
- にしがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.3 [日本]
- ◎にしがも創造舎 3月24日(金)~27日(月)
- 「冬の花火 春の結業」原作=太宰治 演出=倉迫康史
- リージョナルシアター・シリーズ
- ◎東京芸術劇場小ホール1 2月17日(金)~3月5日(日)
- ・劇団Ugly duckling [大阪] 2月17日(金)~19日(日)
- 「改訂版さっちゃん」作=樋口美友喜 演出=池田祐佳理
- ・劇団現代時報 [福岡] 2月21日(火)~22日(水)
- 「親密な他人」作・演出=高村明彦
- ・SKグループ[札幌] 2月25日(土)~26日(日)
- 「再演 A。」作・演出=すかの公
- ・九州芸術劇場×飛ぶ劇場 [北九州] 3月3日(金)~5日(日)
- 「IRON」作・演出=泊瀬志
- インターナショナル・ヴィジターズ・プログラム
- ◎にしがも創造舎 3月19日(日)
- 国際演劇評論家協会シンポジウム

※公演タイトル・会場・日程は予定 問い合わせ 東京国際芸術祭(TIF) TEL 03-5961-5202 <http://anj.or.jp>

左)ドイツ座(© IKO) 中上)スレイマン・アルパッサム・シアターカンパニー 中下)ヤスミン・ゴデール and The Bloody Bench Players(撮影=Tim Lamm) 右上)スリーポイント・プロデュース(撮影=宮内勝) 右下)九州芸術劇場×飛ぶ劇場(会場:1-HALL)



- 【主催】 特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン
- 【共催】 社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
- 【助成】 Asahiアサヒビール芸術文化財団
- 【事業共催】 JAPAN UNION 財団法人地域創造
- 財団法人埼玉県芸術文化振興財団
- 【特別協賛】 Asahiアサヒビール芸術文化財団
- 【協賛】 SHI/EIDO (予定) / トヨタ自動車株式会社 (予定) / Panasonic (予定)
- 【協力】 シアターガイド・シアター・テレビジョン
- 【宣伝協力】 株式会社ポスターハリス・カンパニー
- 平成平成17年度文化庁国際芸術交流支援事業

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307 <http://www.tinyalice.net> [tokyo@tinyalice.ne.jp](mailto:toky@tinyalice.ne.jp)

- 11/8(火)~10(木) ■ 釜山演劇製作所ドンニョック(釜山) ALICE FES 2005参加 「愛、初めてのイメージ-夢」 ☆問=toky@tinyalice.net ☆作・演出=吳治雲 ☆出演=梁允 鄭愛慶 金祐祈 張起薫 ◎釜山の慶星大学演劇専攻の卒業生たちで結成。何人かの演出家がそれぞれの作品を創作、選定して制作する方式で、2000年釜山演劇祭の演出賞と戯曲賞を受賞している。
- 11/12(土)~13(日) ■ 上海戯劇学院(上海) 「三生石TRANSMIGRATION STONE(転生の石)」 詳細は本文p3を参照。
- 11/15(火)~20(日) ■ 小指値 「俺は人間」 ☆問=info@koyubichi.com 090-1550-2136 ☆作・演出=北川陽子 ☆出演=天野史朗 山崎隆司 中林舞 野上綱代 大道寺梨乃 戸田なつこ ◎人間とは人生とは何か?今夜は伝説のクラブキッズと彼や彼女や音楽やS・E・Xや友だちや政治や愛の話をしよう。君も私ももう処女ではない。
- 11/23(日)~24(月) ■ 3-City-Dante Project 「Dante333」 詳細は本文p3を参照。
- 11/26(水)~29(土) ■ 演者 「戦場の桜」 ☆問=en-mono@yahoo.co.jp 090-1536-8310 ☆作・演出=田中誠 ☆出演=桐島大陽 坂本健一 鈴木克治 大江潤明 田中誠 岡澤悠 石塚圭太 豊田ゆかり 寺師あづさ 古田圭史郎 山田智子 松野純明 ◎母から聞いた戦争を舞台にしました。北九州の小さな町の戦争です。

神楽坂 die pratze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

11/3(木・祝)~11/23(水・祝) ■ LUNEプロデュース 「NEO ART展」 ☆問=03-3235-7990(神楽坂die pratze)

- 第一章 11/3(木・祝)~11/9(水) TOKTOKSE 小金井ケイコ展 「ヒーリングアートの幻想世界」 ※初日オープニングあります。是非ご参加下さい。
- 第二章 11/10(木)~11/16(水) KANTO OPOWANO 「ベラドンナの會GIRLS ART展」 創立メンバーによるexhibition 回廊への旅 草はここから始まる...
- 第三章 11/17(木)~11/23(水・祝) 「第一回公演 ベラドンナの會GIRLS ART展」 この公演は女性としての内面性を探るものであり各々の現在を枠にとらわれぬ作品の可能性を露く解放の場である。
- 11/25(金)~11/27(日) ■ rocco-motion project 「セレモニー ~voice or exit~」 ☆問=090-3520-7242 ☆作・演出=ヨシモトヒロコ ☆出演=飯田恵美 佐々木千寿 南波牙 橋本礼 ヨシモトヒロコ ◎「失う」ということ。小川洋子さんの小説「密やかな結晶」からつづいた、ダンス、演劇、映画のあいだにある作品です。私たち一人ひとりの物語のための物語です。
- 11/29(火) & 11/30(水) ■ IQ5000 「まどろみ戦士~WORLD SEED~」 詳細は本文p3を参照。

麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F 03-5545-1385

- 11/2(水)~11/6(日) ■ 池の下 「池の下トクモステージ「病氣」」 ☆問=080-3389-7967(池の下) ☆作=別役実 ☆演出=長野和文 ☆出演=井上美千代 いつみスミオ 櫻井健一郎 他 ◎「病氣」を見て笑える人は幸いなり。「病氣」を見て泣ける人は幸いなり。現代日本のこわれた関係をすどくクスグル、シュールでポップなナンセンスコメディ! 11/8(火) ■ 井上節子/レズシアター 「ふたりでGODOT~二人でゴド~を遊ぶ~他」 ☆問=070-5591-3125(井上節子/レズシアター) ☆作=ベケット ☆構成・演出=井上節子 ☆出演=三沢恵子 井上節子 他 ◎S・ベケットの「ゴド」を待ちながら」を題材にダンスで、それも女二人だけで、

- どこまで遊べるか? その他作品「ダンス・オペラ」を予定。詳細はお問い合わせください。
- 11/10(木)~11/13(日) ■ ダンスシアター他動武 「ダンスシアター他動武「穴-The Hole」」 詳細は本文p3を参照。
- 11/15(火)~11/20(日) ■ 劇集団劇派 「因-75473番」 ☆問=03-3379-4211(劇集団劇派) ☆作=伊藤政美 ☆演出=三浦節郎 ☆出演=中川謙二 青柳ひで子 伊東孝志 倉持遊 金沢理宏 荻野子 他 ◎裁判官、死刑判決。遠い遠いニュースの中の出来事...では無いんです。もうすぐあなただけです。その判決を。準備の出来ていない貴方、是非御覧を!!
- 11/22(火) & 11/23(水・祝) ■ タカハシ佳 「「サドリ」タカハシ佳 ソロ公演」 ☆問=03-3894-8886 or 03-3227-0279 ☆作・演出=衣装=美術=出演=タカハシ佳 ☆照明=鈴木麻生 ☆音響=小滝満 ☆舞台監督=三津久 ◎ダンス・衣装デザイナーであるタカハシ佳はジャンクロード・ガロツタ(仏)、シャワルツ(独)・シャブビューネ劇場)と活動後帰国。今回待望の新作を上演する。
- 11/25(金)~11/29(火) ■ 海千山千プロデュース公演 「マイラストセレモニー」 ☆問=03-3376-4425 またはHP「くじらからはんデジ」へ!! ☆作・演出=鯨エマ ☆音楽=森田浩司 ☆出演=大沼美和子 大久保洋太郎 横道敏(花組之居) 名取幸政(青年座) 他 ◎自分だっていつ死ぬかわからない。と、僕は葬式のシナリオを書きはじめた。しかしその途中で、僕はうっかり死んでしまったんだ... 三途の川で、主人公は行む。
- 12/2(金)~12/5(月) ■ Ump temp 「脳みそなし-ゴッホと名付けられた男」 ☆問=090-9321-4162(Ump temp事務所) ☆原作=別役実 ☆演出=長谷透 ☆出演=山川ありそ 吉野翼 森勢ひろる 谷修 渡辺耕作 篠木幸寿 他 ◎様々な名面に描かれている人物たちが、次第にそして明瞭に吸きだす...そんな奇妙な関係が紡ぎ出す風刺劇。おやおやまた、こいつの頭の中はお花畑か...?

schedule for NOVEMBER 2005

schedule for NOVEMBER 2005